

# あるとき

長谷川時雨

青空文庫



むさしのの草に生れし身なればや

くさの花にぞこころひかるる

と口くちずさんだりしたが、

「わたしの前さき生しやうはルンペンだつたのかしらん。遠い昔、野の

草を宿としてゐて、冷ひえこんで死しんだのかもしれない。それでこん

なに家うちのなかにばかりゐるのかしら？」

門かどを一ひと足あし出て、外の風にあたると、一町も千里もおんなじだ

と氣が軽くなつてしまふのにと、いふと、出でおつくうがる性しやうなの

を知つてゐるものは手を叩いて笑つた。

今朝けさふと、雨上りの草の庭を眺めてゐて、海をおもつた。それ

も漉<sup>はて</sup>しないひろい大洋が戀しくなつたのだ。

昨日<sup>きのふ</sup>のはなしの折にも、私は毎<sup>まいと</sup>年繰返していつてゐる、秋に

は山へいつて、山の風に吹かれてくるのだと、今年も出来ない相

談であらうことを楽しく語りながら、高原に立つて秋草を吹き靡

かす初秋の風に身をまかせて、佇んでゐる自分<sup>じぶん</sup>を描き、風の香<sup>かをり</sup>を

なつかしんでゐたのだ。足を勞さないで、居ながらに風景を貪る

癖<sup>くせ</sup>からなのか、それとも、空ばかり眺めくらしてゐた太古<sup>たいこ</sup>の、前<sup>ぜ</sup>

生<sup>んしやうびと</sup>人<sup>ひと</sup>からの遺傳か、それこそ一<sup>ひとあし</sup>足<sup>あし</sup>から千里<sup>せんり</sup>も飛ぶやうな空

想が、私にはなかなか役にたつ遺産で、私の心を、役<sup>えん</sup>の行<sup>ぎやうじや</sup>者

のやうに、雲にして飛ばしてくれる。

しかし洋<sup>わだ</sup>の原<sup>はら</sup>が戀しくなつたのは、高原<sup>やま</sup>の風が迂<sup>まが</sup>りこむやうに、

空想が海を走つたばかりではなかつた。私の二人の古い友達が、  
海うみのあなたに渡わたつて、長く歸らないことが、堪らなくさびしくな  
つたのだつた。

「此こ間あなたに小つびどく怒られた夢ゆめを見た。いつか長い手  
紙を頂いて、毎日毎日友達は嬉しいなと思ひながら、手紙を書  
かうくと思ひつつ段々のびたのと、あれから久しくたつて、  
やうかんがついたといふので、遠いところまで足を運んだのでし  
たが、一度は代人でパスポートがなくてダメ、二度目は休み時  
間、三度目はとうく間に合はず羊羹は洋行して歸つてしまつ  
たので、追かけもならず、御心入れをとうくムダにしてしま  
ひ、何とも申譯もないと思つてた時の夢だつたのです。元氣で

ゐて下さい。パリになんかベンベンとしてゐると、だんだん馬鹿になることがわかつてゐるけれど、おいそれとは歸られずに居ます。どうぞ病氣はしないで下さい。やせて返事が消えては大變だから待つて下さい。

正宗さんの何か集があつたら送つて下さい。たのみます、なるべく早く。

これはパリ・オペラ夜景。どつしりしてますが、もう汚よごれて鼠色です。岡田八千代」

とした七月二日出の繪はがきは、シベリア經由なのにもまる一ヶ月もたつて、二月十日に出して七月末の日に返送された「虎やの羊やうかん羹の小包と前後して私の手てに渡つた。

なんで、私が怒った夢なんぞ見たのだ。悲しがつてゐる夢を見て、早く歸りたい氣持ちになつてくれればよいにと、さびしかつた心が、海を行く空想を逞しくさせたのだつた。

——かう降りつづいては、汽船の室なかでも垂れこめて——

土用どようのうちの霖つゆのあめ雨びようを、微恙びようの蚊帳すなどのなかから眺め、泥濁どろにご

つた渤海あたりを、帆船ジャンクが漁すなどつてゐる、曾て見た支那海しなのうみあた

りの雨の洋わだなか中をおもひうかべる。そのかたはら、この冷氣は才

ホツク海から寒流がくる潮しほの加減だと書いてあつたがと、ウ口覺

えの新聞知識で天文學者の卵でもあるかのごとく案じ、さういへば、ロシアでは氷に閉された北洋の潮流變更に苦心してゐるといふが、學術的にそれが成功すると、我國の被害は甚大で、氣候の

變化があらうと、嘘か誠か、何かのはしで讀んだ事が妙に氣がかりにもなるが、無論それはとりとめもない考への主流でなく、眼は洋中わだなかのごとき庭の青さと、銹銀色さびぎんいろの重い空の、霧つぽい濕つた外おもてを見てゐたが、空想旅行の方はとづくに船ふねはてて上陸し、パリの友達の寓居をノックしてゐた。

いつぞや林芙美子さんが、パリの食品市場で、八千代さんらしい後姿はねを見たことを話してくださいつたのには、黒い洋服で、長い羽根はねのついた帽子、袋とか籠とかを腕うでにして、齡としをとつてゐたさうだが、それは、およそ私の友達が死ぬまでもしさうにもなく、想像にもさうは思はれない姿だつた。私は鼠色の彼女が繪ハガキへ書いてよこしたパリ・オペラ座ざのやうに、どつしりしてゐるが、



古<sup>ふる</sup>びた鼠色で彼女があつてくれないことを、友達の名譽恢復のため<sup>に</sup>に祈つて、扉の外で待つた。

私の友達は、すこし意固地なくらゐる我儘なところがあつて、身にそぐはない洋服や帽子の飾りをつけて歩くことの出来る氣質<sup>たち</sup>ではなかつた。三年や五年着るものに不自由するとは思へない。彼女は白い足袋がなくなれば、足袋もつくれるし、草履も工夫して造れる人だ。まして着物でも帯でも、きちんとした裁縫<sup>が</sup>出来る。身のりのもの一切自身でととのへられないものはないのだ。若い時から日本髪さへひとりで結<sup>ゆ</sup>へたのだつた。私たち明治時代に生れたものは、心は新らしいものを貪りながら、躰<sup>しつけ</sup>られたことは昔の女とおなじだつたので、身<sup>みだしなみ</sup>嗜<sup>しみ</sup>には頑<sup>かたく</sup>固<sup>くな</sup>なほどだつた。

ことに友達は目立ない澁いづくりを好んだ。流行や周圍に負ける人ではなかつた。吟味のゆき届くたちだつた。西洋のお婆さんになつたとしても、<sup>この</sup>好みのよいことに異<sup>ちが</sup>ひはない筈だ——

と思つてゐると、すこし痩せたかと思ふが、あの、ありあまる髪をキユツとメ《しめ》て、無造作に卷いた、色の白い顔が笑つた。胸もともキチンとした縞の着附けで、例によつて灰<sup>あくぬ</sup>抜けのした瀟洒な彼女だ。この間、讀賣新聞の文藝欄が傳へた、日本劇の衣裳や監督をしたといふ時の、他の人と竝んで寫つてゐた、寫眞とちつとも違はなかつた。

私はパリで逢<sup>あ</sup>つてゐるといふ事なんぞは素<sup>す</sup>つとばしてしまつて、勝手にいつたものだ。

「甘いものそんなに好きぢやないの知ってるんだけど、果實くだものは送らなくつたつてあるだらうし——」

私はくすくすと笑ひだしてしまつた。友達は蜜柑があんまり好きで膽石を患わづらつたことがあつたのだ。ずっと前にも急病だといふので澁谷の家へ急いでいつたら、矢つ張り蜜柑の食べすぎだつた。私が行くと、寢臺したの下へ、あわてて蜜柑の皮が山のやうになつてゐるお盆を押しかくしたが、苦しがつて吐いた蜜柑の汁が、實みが、顔にくつついてゐて、すぐさま露見したことがあるのだ。

「歸つてきて、燦さんく々會で、澤山ためこんでおいた、そつちの演し劇ばるの講義を受けもつてくれない？ それに——」

私はそこで急に思ひついたので。それは昨夜ゆうべ讀んだ、ロシアで

九月一日から十日まで大演劇祭のあることだつた。

「モスクワへ寄つて、大演劇祭に上演されるものをみんな見て来てしまはない？　ね、實に好い機會だから。出来るだけ、新しい演劇をためこんできて、今までパリで見たものと對照して話してきかせてくださいね。屹度みんなも期待してくれる。そしてね、ゆつくりと、長く長く實によく貴女あなたは見ておいたのだから、日本の芝居と考へあはせて見てね。」

そんなことを言つてゐるうちに二人は泣いたやうだつた。現實の空想家の眼はぬれた。私は勝手にしやべりつづけける。

「わたしは、も一度海いちどを越して、ロスアンゼルスへ行くの。」  
其處そこには、この友達が一時非常に仲をよくした田村俊子さんが

居るのだ。

「俊子さんは、鈴木さんが（夫君）日本へ來てゐて、突然なくなつたので、大變嘆いて、ひとりでバンクーバに居られないから、ロスアンゼルスは氣候もいいし、上山浦路さんも獨りで残つてゐるから、そこへ行くといつてよこしたきりなの。」

一本の齒が抜けるとほかの齒が寒い。女でおなじやうな仕事をしてきた人たちが、みなからいたはられるところに、異境で涙にひたつてゐるのを思ふと苦しい。私は、私なんぞでも、日本に残つてゐるものは、身をいたはらなければいけないと思つた。私一人の死でも外國に居るさびしい人たちには、一本の齒がぬけたやうに寒く感じられるだらう。で、私は友達にむかつて元氣に言つた。

「俊子さんは、ハリウッドかなんかで、素張らしい映畫脚本でも發表するかもしれない。あの位な腕前は、さうザラにあるもんどぢやないから、屹度立直る。」

田村俊子作とか監督とかいふ映畫が輸入されてくれば嬉しい。私がよろこべば、私を愛してくれる若い女<sup>ひと</sup>たちがヂヤンヂヤン宣傳してくれるにきまつてゐる。さうなると若い男衆たちも追従する。盛んなるかな！

私は嬉しくなつて笑つた。友達の手を握つて振る恰好をして、自分<sup>じぶん</sup>だけの手を振つた。

「八千公<sup>やちこう</sup>しつかりね、モスクワでは、十日間に廿二回の觀劇よ、好い機會だから是非見ておいてください。あたしたち随分ぼんや

りして生いきてしまつたんだから。アメリカへも一緒に行けると好い  
んだけれど——」

若いとき、曾我の家五郎十郎劇を見てきて、二人で眞似て興じ  
たときの、五郎の役に、及五郎に扮した友達が、自分でもをかし  
くつて、キユウキユウ笑ひ泣きしながら演じた無邪氣さが眼に來  
た。みんなで寄よつて、あんな笑ひを寫したらいいな——

再び、わたしは笑つてゐるやうな聲を出した。

（「早稻田文學」昭和九年九月號）





# 青空文庫情報

底本：「桃」中央公論社

1939（昭和14）年2月10日発行

初出：「早稻田文學 昭和九年九月號」

1934（昭和9）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2008年12月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# あるとき

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>